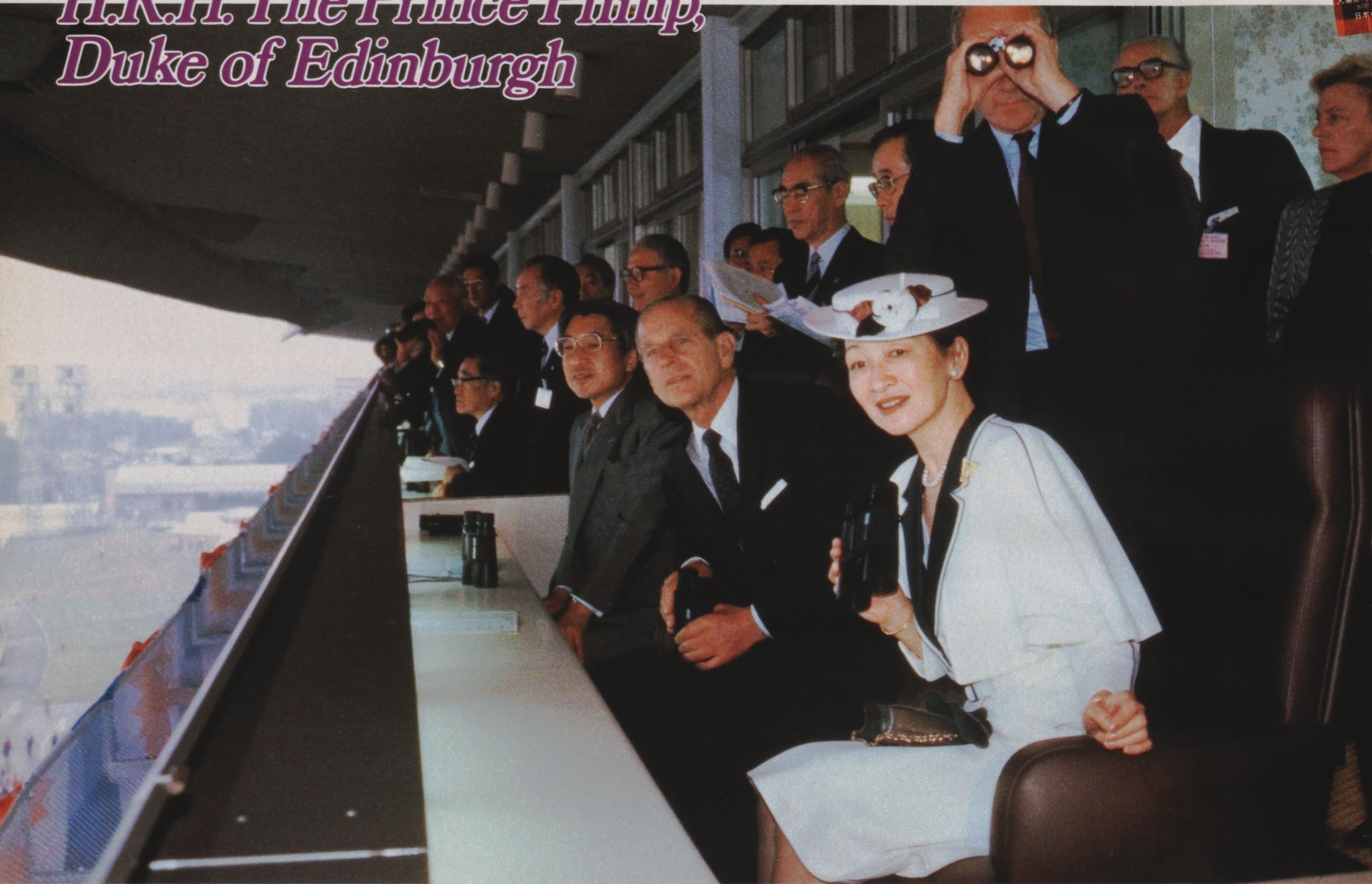


Welcome H.R.H. The Prince Philip, Duke of Edinburgh



▲フィリップ殿下をはさんで8、9レースをご観戦された



府中の最も華やかな一日

10月11日・東京競馬場

エジンバラ公、皇太子ご夫妻ご来場

●フォト 川本武司



▲東京競馬場に到着されたフィリップ殿下を皇太子ご夫妻が迎えられた

▼中央競馬メモリアルホールで開催中の「日本の馬文化展」をご覧になられた



10月11日、土曜日、東京はいくつの雨模様だったが、府中の東京競馬場は朝から華やかな雰囲気になっていった。
イギリスのエリザベス女王の夫君であるエジンバラ公フィリップ殿下が皇太子ご夫妻のエスコートでご来場され、日本の競馬を観戦されることになっていったからだ。

サラブレッド発祥の地イギリスでは、当然のように王室と競馬のつながりも深く、王室主催のアスコット競馬は華やかな社交場となる。エリザベス女王は大の競馬ファンとして知られ、数多くの名馬のオーナーとなっておられる。

フィリップ殿下は国際馬術連盟理事会会長を務められ、今回の来日はその理事会にご出席のためだったが、日本の競馬を観戦したい、というご希望で東京競馬場にご来場されることになったのだ。正午近くに東京競馬場にお着きになったフィリップ殿下は、皇太子ご夫妻のお

出迎えをうけ、メモリアルホールで開催中の「日本の馬文化特別展」をご覧になられた後、五階の貴賓室でレースを観戦された。

日本の近代競馬の始まりは明治初期、横浜で行われた「洋式競馬」とされているが、明治天皇はしばしば根岸競馬場に足を運ばれて競馬に深い理解を示された。天皇杯を下賜され「皇室御賞典競走」として施行されたのが、現行の「天皇賞」の始まりだった。天皇陛下は大正11年、摂政だった時に目黒競馬場を訪ねられたことがあるが、それ以来日本の皇室が競馬場へご来場されることはなかった。

この日、「エジンバラ公御来場記念」と改称された1600馬の特別レースはゴール前で激戦となった。レースを堪能されたフィリップ殿下と皇太子ご夫妻は雨の中、馬場内で行われた表彰式に臨まれた。勝ったメジロデヴィッシュのオーナー・北野俊雄氏、大久保洋吉調教師、的場均騎手に親しく声を掛けられた。日本の競馬史上「最も華やかな表彰式」となった。スタンドの多くのファンも温かくお三方を歓迎した、府中の最も華やかな一日だった。





▲「エジンバラ公御来場記念」ではゴール前のはげしい3頭の競り合いに身を乗り出された



◀▲表彰式ではメジロディッシュのオーナー・北野俊雄さんに優勝カップを渡され、親しく声を掛けられた



▲皇太子ご夫妻も「雨のレースでたいへんでしたな」と関係者に声を掛けられた



お気軽に競馬場へ——藤島泰輔

日本の皇位継承者で、障害を含む馬術を本格的に習得されたのは皇太子さんが最初ではないかと思う。学習院には戦前からの立派な馬場があって、終戦にならなければ、私も中等科三年生の正科として馬術を学ぶ筈だったが一年のときに終戦となり、乗馬の機会を逸してしまった。

しかし皇太子さんは高等科三年時、馬術部キャプテンとなり、他校との試合でも大いに活躍された。昭和二十六、七年頃のことである。その頃の学習院馬術部は強かった。私は山岳部のキャプテンで、運動部の予算分捕り合戦では、馬術部といつもやりあったものだ。

エジンバラ公の来日を機に、皇太子御夫妻がはじめて日本の競馬場に御越しになったのは競馬ファンの人として極めて喜ばしいことである。明治維新以来、日本は、皇室をはじめ、凡ゆる分野で大英帝国を近代化の見本として来た。

近代競馬はもとより英国が本場である。そして、英国王室は自らの競走馬を持ち、エリザベス女王がことに競馬に熱中されているのはテレビなどでつとに承知している。いろいろ警備等の問題もあろうが、折角、エジンバラ公がきっかけを作ってくれたロイヤル・ファミリーの競馬観戦が、日本で定着することを願うや切である。

(作家)



▲記念すべきレースのゴール前の激戦。内から、メジロディッシュ(1着)、オノデンモモコ(2着)、ダイヤモンドラン(3着)